

シリーズ 私の一冊の本

短期大学部歯科衛生学科 野口 有紀 先生

中室 牧子 著

『「学力」の経済学』

閲覧室2階 371.3/N 37 ディスカヴァー・トゥエンティワン出版

「ご褒美で子どもを釣ってはいけない?」「ほめて育てるべきなのか?」など科学的根拠から明らかにしており、教育での思い込みに一石を投じている本です。教育では、個人の経験値等に基づいて主張される場面が多く、違和感を拭えないことが多々あります。どうしてそれが正しいのか、納得できる説明がなされないケースも見られます。

この本の中で、ご褒美と学力の面白い実験が紹介されています。「テストで良い点を取ればご褒美をあげるグループ」と「本を1冊読んだらご褒美をあげるグループ」では、どちらが子どもの学力を上げる効果があったかというものです。効果のあったグループは後者でした。それはどうしてでしょうか。子ども達のご褒美に対して、どのような行動をとったかがキーポイントで、ご褒美に対し何をすべきか具体的な方法を示すことが学力を上げることに大切だからなのです。勉強のやり方を示すご褒美設定をする方が、結果を重視するより良いということです。面倒がらず、具体的な方法を分かりやすく示していくことが重要だと思います。これは教育の現場だけでなく他にも言えることです。今話題になっているラグビー日本代表チームにも当てはまります。エディージャパンでは、ラグビーワールドカップで8位以内に入るためにがんばろうではなく、8位以内に入るために何をすべきかについて、各選手に合った具体的トレーニング方法を示し指導していました。結果は皆様のご存知の通りです。

また、この本では「自制心」や「やり抜く力」についても取り上げています。「認知能力」(IQ や学力など)だけでなく、「非認知能力」(誠実さ、忍耐強さ、社交性、好奇心の強さなど)が人生に大きな役割を果たしているということについても、データを用いて説明しています。著者は、「学校とは、ただ単に勉強をする場所ではなく、先生や同級生から多くのことを学び、『非認知能力』を培う場所」と述べています。学力や知識も大切ですが、社会では「自制心」や「やり抜く力」など「非認知能力」が大切だと実感します。

この本で述べられていることを、教育の現場や子育てだけでなく、職場、家庭、グループ団体など様々な場面に置き換えて考えることもできます。評論家や専門家の意見、経験談に耳を傾ける前に、この本を読むと納得ができ、物の見方が変わるのではないのでしょうか。